

『沈清伝』と近松に見る親子関係

PARENT-CHILD RELATIONSHIP
IN *SHIMCHONJEON* AND CHIKAMATSU

明 眞 淑*

Respect for the old has been traditionally made much of as a virtue in Korea. In *Sangoku Shiki* (History of the Three Countries) there is a record of a king who gave rice and grains to the old to praise them. And also in *Sangoku Iji* (Anecdotes of the Three Countries) we can see people who showed great devotion to their parents, along with kings, noblemen and saints, thought in no other part of the book appear common people. Three tales of the common people who were devoted to their parents offered a material for the P'ansori *Shimchonjeon*. *Shimchonjeon* is one of the P'ansori that appeared in the latter half of the Korean dynasty, whose ideology was based on Confucianism, between late 17th century and early 18th century. Its theme is filial devotion of a daughter who sacrificed herself for her blind father.

By the way, what kind of parent-child relationship is seen in Chikamatu' works? In *Shinjūmono* (stories of lovers' suicide) we

*MYUNG Jin-sook 実践女子大学大学院。同徳女子大学卒、東京女子大学大学院修了。論文に「近松世話浄瑠璃に見る『孝』の情」がある。

can see childrens' love for their parents, which is depicted in the reminiscent monologues before the suicide. The heroes and heroines choose suicide, dreaming only of their own happiness to come. But, almost without fail, they remember their parents and lament right before their suicide.

On the other hand, in *Onna Goroshi Abura no Jigoku* (Murder of a Woman in the Hell of Oil) the hero is an undevoted and dissipated son, Yohei. The parents' anxiety over their son who keeps swearing shows their true love for him. In *Meido no Hikyaku* also we can see parents' love for their child.

It is natural for the mankind that parents love their children ; children, their parents. In order to investigate the parent-child relationships that we find in the worlds of *Shimchonjeon* and *Chikamatsu*, I will take a close look at the cases in which parents' love for their children is stronger than children's love for their parents, and vice versa.

『シムチョンジョン沈清伝』と近松に見る親子関係について考えてみたいと思う。近松における親子関係を研究しているなかで、近松とほぼ同時代に発生し、なおかつ近松と同じ劇文学であるパンソリ系小説の『沈清伝』と比較してみるのは興味深いことと思ひ、このような試みをしてみたのである。

李朝の代表的な庶民文学のパンソリは、その発生年代が17世紀末から18世紀初め頃と推定されている。一人の太夫が物語を語り、かつ歌う。それには大きな鼓を打つ伴奏者がつく。語り物と音楽とが一つとなったものである。文学であると同時に音楽である。それをハングルという文字で書いたものを、楽器を伴って演じるパンソリとは区別して、パンソリ系小説という。すなわち戯曲で

ある。パンソリそのものをいう場合は作品名を『…………歌』、パンソリ系小説をいう場合は『…………伝』と、区別している。古くは十二作品があったといわれているが、現存するのは五作品だけである。『沈清伝』はその一つである。

『沈清伝』は韓国最古の史書『三国史記』^①『三国遺事』^②などに記されている孝行説話をもとにした作品である。盲目である父親の目を開けさせるために自らを犠牲にする娘の話である。われわれ韓国人が儒教思想が入ってくる前から「孝」を美德として重んじていたことはいまさらいうまでもない。『三国史記』に漏れた事項を集録した『三国遺事』は、その内容が王様や貴族・僧侶たちの話に限られているが、親孝行をした庶民の話だけはそれらと一緒に記されているのである。

李朝は儒教思想を国家の理念としていた。その理念は文学全般にわたって、親子から君臣に拡大する封建家族制度が背景となってよく現われている。これは李朝文学もしくは韓国文学の特徴ともいえるが、作品のほとんどの主人公が英雄として描かれている。その英雄の最も基本となるのが、親に対して孝子であること。パンソリ系小説がみなそうだが、なかでも『沈清伝』はそれを代表する作品である。

『沈清伝』の内容を簡単に紹介すると、次のとおりである。^③

黄海道の黄州の桃花洞という村に、盲人の沈鶴九^{シムハック}という人があった。貧しい不遇な境遇におかれていたが、妻の懸命な支えもあって、周りから尊敬されていた。しかし、その妻との間に子供がなくて、申し子を祈願する。やがてその祈りがかなって清^{チヨン}という女の子が生まれた。ところが清は生まれて七日めの日に母親に死なれてしまう。父親の沈鶴九は清をもらい乳で育てる。目の不自由な父親と幼い清は乞食同然の暮らしをするが、いつも父親の杖代わりになって出歩く清の孝心は村中の人々に感銘を与えた。やがて十五歳になった清は、特にかわいがってくれる人の家の仕事を手伝いながら、父親を養っていた。

ある日、仕事に出かけた娘の帰りが遅いのを心配した父親は清を迎えにいく。ところが、途中橋の上で足を踏み外して川に落ちてしまう。それを通りがかりのお坊さんが救って、家まで連れてきてくれる。そこへ帰ってきた清はお坊さんにお礼をいい、丁寧にもてなしをした。そこで清はそのお坊さんから「父親の盲目は前世の罪のためである。それを仏様に祈願して許してもらおうと目が開く。またそれのためには、お寺に米三百石を施主しなければならない。」と教えてもらう。清は毎晩祈って、父親の為に自分が犠牲になることを覚悟する。

ちょうどそこへ、中国の南京に行く商人たちが海の荒波を静めるために使う犠牲として、十五歳の女の子を買いに村へやってきた。その話を聞いた清は、商人たちと会い、米三百石で自分を売ることにした。そして、父親には仕事先の家の養女になり、代りに米をもらうことにしたと嘘をつく。しかし、それは商人たちの急な訪問によってばれてしまう。

悲しむ父親を一人残し、清は商人たちの船に乗る。もっぱら父親の開眼を祈りながら海に飛び込んだ。

ところが、清は水中で閻魔大王の命令により、竜宮へ行かされる。清はそこで極めて歓待された後、再びこの世に戻ることになる。この世はいつの間にか三年という月日が経っていた。そしてその、すぐれた美貌が買われ、皇帝の妃になる。

父親のことを一刻も忘れることのできぬ清は、そのことを皇帝に話す。皇帝は自分の生命を捨ててまで親に尽くした清の孝心に感動し、清に父親を会わせるため、全国の盲人を招き宴会を開くことにした。

清は酒宴を開いてから幾日経っても父親が来ないので、すでに目が開いたのかも知れないと、ほぼあきらめている。そこへ父親の沈鶴九は遅れてやってくる。沈鶴九は死んだはずの娘に会い、夢か現つかと思っているうち、目が見えるようになるのである。

作品の構成から見ると『沈清伝』は悲劇としての要素をもっている。しかし、結末はハッピー・エンドになっている。これは「苦しみが尽きて幸福が来る」、「犠牲」の後は「果報」が来るという、李朝的または韓国的な考え方といえよう。『神話の中の韓国人』^④という書物の中で、李御寧氏は、韓国の「孝」の美談は必ず三つの公式の上に成り立っていると、述べている。三つの公式とは、「貧困」と「犠牲」と「果報」である。清を甦らせ、幸せな余生を送らせるという結末は、「孝」を尽くした孝子に対する当然のものであったろう。

こうした娘に対して父親の沈鶴九はどうであったのか。不自由な身体をもって幼子を育てた、沈鶴九の親としてのわが子に対する恩は極めて大きいものである。また、自分のために死にゆく娘を前にして、「わが子が死んで目が開いたとて何の甲斐があるか」と嘆く。娘を救おうとして積極的になれなかったことはあっても自分では精一杯の不憫を表すのである。しかし、わが子に対して愛情は十分に持ちながらも、それを具体的に実現することができない。これが『沈清伝』における親の真の姿であろう。もしこの親子関係を矢印で示すと

親 ← 子

のようになると思う。

さて、近松における親子関係はいかなるものであろう。近松の最晩年の作品『女殺油地獄』（享保六年1721）は、題名通り、殺人事件を題材としたものである。しかし、ここで注目してみたいのは、殺人事件そのものよりは、その事件に至る過程として描かれている複雑な親子関係である。主人公の与兵衛と父親の徳兵衛は義理の親子である。父親の徳兵衛は元番頭として働いていたが、後に父親となった人物である。

このように、義父と息子との親子の葛藤が見られる作品としては、『心中二枚絵草紙』（宝永三年1706）がある。主人公の市郎右衛門は、遊女通いに金を費やした、世間的に見ればふしだらな息子である点で、与兵衛と共通している。また、二人の父親、介右衛門と徳兵衛には、息子に対して「義理も有不便も有」って、気遣う父親の姿が共通して見えるのである。この二つの親子関係は表面

上は似ている。

しかし、父親と息子との間にある互いの義理立てまたは愛情の表現において、『女殺油地獄』の方が大きな開きを持っているように思われる。与兵衛の義父の徳兵衛は、家族に悪態をついたあげく母親に勘当され出ていった与兵衛に対して、親としての精一杯の愛情表現をする。「子に世話病むは親の役、苦労とも存ぜ」ぬ徳兵衛の言葉には、子供がいかにあろうとも親は子供のためにどこまでも苦しむという様子がうかがえる。徳兵衛は実の母親のおさはと互いに気遣いながら、息子に対して、「じつしーばい」する、実子に倍する愛情を示すのである。

一方の与兵衛にはそういう親の愛情に対する子としてのこたえが見えない。お吉の家で立ち聞きをする場面は論議の分かれるところであるが、少なくとも近松は与兵衛の心理の変化を書いていないのである。殺人犯になってしまった時、初めて自分の不孝を反省するのである。親の深い愛情への反省であろう。「子は親のじひで立親は子の孝で立」という徳兵衛の言葉によれば、親の慈悲に対し「孝」でこたえることができなかった、子としての反省なのであろう。しかし、その反省は人間なら誰でも感じうる感情ともいえよう。それに対する親ならびにまわりの反応について近松自身は何も語っていない。それについての判断は観客またはわれわれ読者に任せているのであろう。

義理の関係ではあったものの、兄の太兵衛にまで深く信頼されている父親徳兵衛の、実の親以上の愛情と誠実さ。また夫と息子の間を懸命につくろおうとする母親おさはの「周利はんどく（特）阿呆でも、阿じやせ太子の鬼子でも、母の身で何の憎かろう」と思う親心。これらに対して、与兵衛の「一生不孝放埒」だった悪人ぶりは鮮やかなまでに対照的といえよう。

この『女殺油地獄』における親子を片岡徳雄氏は「断絶する親子関係」^⑤としているが、こうした親子の関係を矢印で示すと

親 → 子

となると思う。

このように、親の子供に対する愛情が濃密に描き出されているものには、『冥途の飛脚』（正徳元年1711）が挙げられる。新口村での、父親の孫右衛門と息子の忠兵衛とが愁嘆にくれる場面がそれである。孫右衛門は、世間に対する義理のため、最後になるかもしれないわが子との対面を果たすことができない。さらに、一足でも早く捕り手から逃げさせようと心の中の葛藤を押さえ切る。しかし、孫右衛門には、親としての愛情を十分に見いだすことができよう。

隠れて父親の姿を見ながらも何一つできない忠兵衛には、孫右衛門の親としてのあるべき姿とは対照的な、子としての姿が見られる。しかし、『心中二枚絵草紙』の市郎右衛門、『女殺油地獄』の与兵衛などのように女狂いに金を使い困り果てて犯罪を犯してしまう主人公と、この忠兵衛も同類の人物なのである。近松の世話物によく見られる男主人公の典型といえよう。忠兵衛と孫右衛門には与兵衛と徳兵衛の関係ほど開きはないが、親の愛情にこたえることができない点では、忠兵衛は与兵衛とさほど違わないと思われる。忠兵衛孫右衛門親子の関係を矢印で示すと、前の『女殺油地獄』と同じようになると思う。

これらの作品以外にも親と子、特に息子との関係が描かれているものには、『丹波与作待夜の小室節』（宝永五年1708）、『淀鯉出世滝徳』（宝永五年1708）、『夕霧阿波鳴渡』（正徳二年1712）、『山崎与次兵衛寿の門松』（享保三年1718）などがある。いずれも親のわが子に対する積極的な愛情の表現が見られる。

また、近松の作品には『心中天の網島』（享保五年1720）のおさんと父親の五左衛門のように親と娘の関係を見ることができる。店のことを等閑にし、馴染みの遊女小春に夢中になっている紙屋治兵衛の妻おさんは、夫に対し献身的に尽くす。小春を助けようと店の仕切金や着物などを出してやるくらいである。そのような娘を見兼ねた父親の五左衛門は、治兵衛に離縁を迫る。そして、有無をいわせずおさんを連れて家に帰る。

嫁いだ娘に対する親の真の心がうかがえるものとしては他に『大経師昔暦』（正徳五年1715）がある。不義の罪を着せられたわが子を必死で救けようとする親の切ない気持ちがよく現われているといえよう。娘に借金をせがむ父親の

道順はふしだらな面も見せるが、後には窮地に陥った娘に対して、妻とともに子を思う親の面を見せるのである。

『鐘の権三重帷子』（享保二年1717）のおさいの親岩木忠太兵衛夫婦は、不義を犯した娘を嘆く点では道順夫婦と共通している。しかし、世間を恐れ婿に敵討ちをするよう勧める点では大きな違いを見せている。世間に対する武家と町人の考え方の違いもあろう。「此上になんの恥」といい、娘を連れ戻そうとする『心中天の網島』の五左衛門と、「世間はつて何にせん」と人に返すべき金を娘に与えて逃げさせる『大経師昔暦』の道順には、世間体よりもわが子の身上を案じる様子がうかがえるといえよう。

必死でわが子を救けようとする道順夫婦を親に持つおさんも、「一日でもながらへるが孝行」と、「ふかい親の慈悲」にこたえるため必死で逃げ隠れをするのである。親の愛情にこたえる具体的な行動を示すという点では、近松世話物の全体を通して唯一ではなかろうか。この親子の関係を矢印で表すと、

親 → 子

のようになると思う。勿論、『心中天の網島』のおさんは、父親に対する具体的な行動は見せないため、前の『女殺油地獄』や『冥途の飛脚』などとおなじように見ていいのではないかと思う。

以上のように見てきた『沈清伝』と近松における親子関係をまとめてみると、『沈清伝』では親の子に対する愛情よりは、子の親に対する「孝」が、そして近松においては親の愛情に対する子のこたえとしての「孝」が見られはするが、やはり親の子に対する愛情が浮き彫りに描かれているといえよう。心中物のほとんど全部の主人公たちが必ずといっていいほど、死ぬ直前に親のことを思い泣き崩れる。親の恩に報いることなく、しかも親に先立って死ぬことを最大の親不孝と思うのであろう。親の自分に対する愛情には気づいている。生き残って親孝行をしたい。それが彼らの意志であろう。しかし、死ぬことしかできない自分たちの運命をどうすることもできずに、死んでいく。これが近松と『沈清伝』の大きな違いではないかと思う。

『沈清伝』にも、近松にも、親の子に対する愛情、また子の親に対する「孝」を見ることはできる。

しかし、『沈清伝』の場合は、親の子に対する愛情よりは子の親に対する「孝」の方が強調されている。親は子に対して愛情を十分に持ちながらも、それを具体的に示すことができない。一方、近松の場合は、子の親に対する「孝」よりは親の子に対する愛情の方が浮き彫りにされている。内心親の愛情に対するこたえとして「孝」を行ないたいと思うが、やはり具体的な行動としては現われない。

『沈清伝』と近松に見られる親子関係は、親の愛情に子のこたえとしての「孝」、といったような絵に描いたような理想的なものではない。親から子へ、子から親へ、とそれぞれ一方通行的な親子関係が見受けられるのではないかと思うのである。

注

- ① 韓国最古の史書。1145年高麗の仁宗の命により、金富軾らが撰した新羅・高句麗・百済の三国の史書。全50巻
- ② 高麗の忠烈王の時、一然が撰した三国の遺聞書。特に、仏教説話が多く。全5巻。
- ③ 姜漢永校注『申在孝パンソリ辞説ヨソツマダン集』（1988年螢雪出版社）による。訳は発表者。
- ④ 甲寅出版社（1985年）。
- ⑤ 『日本人の親子像』（1989年東洋館出版社）

討議要旨

国文学研究資料館の武井協三氏から「沈清伝の一番の泣かせどころはどこか、芸能の比較はその上演を想定して行なうことが大事なのではないか」という意見が述べられた。